慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	デカルト「第三省察」における観念と対象性の問題
Sub Title	Le problème de l'idée et son objectivité chez la Troisième Méditation de Descartes
Author	秋保, 亘(Akiho, Wataru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2013
Jtitle	哲學 No.131 (2013. 3) ,p.41- 62
JaLC DOI	
Abstract	Dans ce présent article, nous analysons le rôle de la théorie del'idée concernant surtout le rapport avec son objet chez la TroisièmeMéditation. Dans la Troisième Méditation, Descartes vise à dépasserle cogito vers le dehors de la pensée, en sélectionnant la réalité objectivede l'idée apte à démontrer l'existence de l'objet hors de lapensée. C'est, il nous semble, ce dont l'objectivité de l'idée se chargeau cours de la démonstration. Car, c'est parce que la réalité objectivede l'idée est de l'objectivité de l'idée elle-même, que la réalité objectiverend possible la pensée ayant son fondement en elle-même dedépasser hors d'elle-même.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000131-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

デカルト「第三省察」における観念と対象性の問題

秋　保　　亘*

Le problème de l'idée et son objectivité chez la Troisième Méditation de Descartes

Wataru Akiho

Dans ce présent article, nous analysons le rôle de la théorie de l'idée concernant surtout le rapport avec son objet chez la Troisième Méditation. Dans la Troisième Méditation, Descartes vise à dépasser le cogito vers le dehors de la pensée, en sélectionnant la réalité objective de l'idée apte à démontrer l'existence de l'objet hors de la pensée. C'est, il nous semble, ce dont l'objectivité de l'idée se charge au cours de la démonstration. Car, c'est parce que la réalité objective de l'idée est de l'objectivité de l'idée elle-même, que la réalité objective rend possible la pensée ayant son fondement en elle-même de dépasser hors d'elle-même.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学）

はじめに

本稿では，デカルトが「第三省察」において，神の実在の第一証明へといたるまでに，またそこへといたるために，論証の足場として観念にかんする議論を展開していく場面に考察の焦点をしぼる．この場面で私たちはとりわけ，観念とその対象とのかかわりを問題とする．問題をより具体的にいえば，観念の対象はどこにあるのか，観念と対象との関係はどのようなものか，観念と対象はどのように区別されるのか，その区別の意義とは何か，ということである．こうした諸問題を検討することで，当該証明において枢要な役割を与えられている realitas objectiva［対象的事象性］の機能の一端を明示することを目的とする[1].

『省察』における観念までの途

私たちが問題とする，「第三省察」における神の実在の第一証明にいたるまでの観念についての議論を分析する前に，まずはデカルトが観念をめぐる考察に入るまでの『省察』の議論を，私たちの分析に必要なかぎり，しかも手短にまとめよう．というのも，当該箇所における観念論の内実を把握するためには，その議論の背景ともくろみをまずはおさえる必要があると思われるからである．

「第三省察」の冒頭に近い箇所において，明晰かつ判明に私が知得する［percipio］ことにかんする「一般的規則」が打ち立てられる．つまり，「私がきわめて明晰かつ判明に知得するところのすべてのものは真である」［AT, Ⅶ, 35: 14-15[2]］ということが，「一般的規則」として打ち立てられる

[1] 本稿で私たちは，『省察』本文の観念説を「形而上学の立論」とし，また『省察』本文的観念と「諸答弁」的観念とを区別して論じる必要を説く村上の解釈に多くを負っている．村上勝三『観念と存在　デカルト研究 1』知泉書館，2004 年．とりわけ pp. 155-162 を参照．

[2] *L'Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam & Paul Tannery, Nouvelle

のである．この個所まで，「第一省察」において，疑いをさしはさむことのできるものについて，それに対して真である，または偽であるといった判断を差し控えることを経由して，「第二省察」に入り，これだけは疑うことのできないものとしての私の思惟が提示されていた．ここで「私が知得する」ということは，この「一般的規則」の適応されるべき範囲が，「第二省察」において疑うことができないものとして提示されていた私の思惟，私に固有で私ひとりの思惟に限定されなければならないということである．つまり，ここにおいては，『省察』の探求が始まってからこれまでのところ，世界は私の思惟そのものにほかならず，私の思惟以外の要素が，それについての判断を差し控えることによって，すべて留保されているのである．

ここから新たに，探求は開始されなければならない．すなわち，今のところ世界は「私」の思惟そのものであり，それ以外のものはまだ確定されていないので，世界を世界として規定し，加えて，学の要求する確実なものへと，明晰判明知の規則をいたらしめるためには，「私」の外部を，ということは要するに私の思惟の外部を（その一点のみであっても）探求し，そのことによって，「私」の思惟の内／外を同時的に分別することが，まずは求められることがらであることになる[3]．

デカルト観念論の射程―「第三省察」における

「第三省察」においてデカルトは，「私のうちに［in me］」・「私の外に［extra me］」ということばを，意図をもって多用している．というのも『省察』のこの個所では，先に述べたように，学において確実なものを獲得するために要求されるもののうちのひとつとして，私の思惟の外部とし

présentation par P. Costabel et B. Rochot, Vrin, 1964–1974. 以下では AT の表記と巻数をいちいち表記せず，［頁数：行数］と略記する．

[3] 以上のまとめに際して，Geneviève Rodis-Lewis, *L'œuvre de Descartes*, t. 1, Vrin, 1971, p. 261, pp. 263–269. を参照した．

ての，神の実在が証明されるべく目指されるからである．そしてデカルトが〈私のうちにある〉というあり方を割りあてているものこそ，観念である（「私のうちにある諸観念」[37: 23–24]）．加えて，この観念についての議論が目指していることがらは，「それの観念が私のうちにあるもの［res］のうちで，私の外に実在するものがあるかどうかを探求する［40: 5–7］」ということである．つまり，「私のうちある」観念を議論の立脚点としつつ，「私の外に」実在するものがあるかどうかを探求していく，その過程で見出されることになる第一のものが，神の実在である，という論の運びになっており，このことが「第三省察」の議論全体に底流するおおきなもくろみとなっている，ということができる．確かに神にかんしては，それが私の外に実在する，という表現は見出されず，単に「神は実在する」という表現がなされるだけであるが，以上のことを考えあわせれば，ことがらとしては，神は私の外に，あるいは少なくとも私とはことなる res として実在する，ということが示されていくといえる．

さて，以上のもくろみのもとで，観念をたよりに私の思惟の外部が目指される議論を，テクストにそくして眺めていこう．まず観念には次のような規定が与えられる．すなわち，「これら［私の思惟のすべて］の中のあるものは，いわば res の像［imago］であり，観念という名は元来これのみに適合する．」[37: 3–4] と規定される．この規定のもとで，観念は次の三つのものに分類される．つまり，「これら観念のうちで，あるものは本有的であり［innata］，あるものは外来的であり［adventitia］，あるものは私自身から作られたものである［a me ipso facta］と私には思われる．」[37: 29–38: 1] とされる[4]．ここで，観念の議論がもくろんでいることがら

[4] 観念の imago 的理解，さらにいわゆる「観念の三分類」については本稿では扱わない．この問題についてはたとえば以下のものを参照．Rodis-Lewis, *Op. cit.*, pp. 272–277. Gilson, *Discours de la méthode, texte et commentaire*, Vrin, 1925 (1962), p. 318. Martial Gueroult, *Destartes selon l'ordre des raisons, t.1: L'âme et Dieu*, Aubier, 1953, pp. 168–176.

が，私の外に実在するものへといたることであることを思い起こすならば，検討されるべきなのは外来的な観念である．というのは，外来的な観念とは，「私の外に存する［extra me positis］或るものどもに由来すると，私がこれまで判断してきた［38: 5–6］」ものだからである．しかしながら，どのような理由で，私はこれまでそのように判断してきたのかが吟味された結果，「これまでは確実な判断によってではなく，単に或る盲目的な衝動によってのみ［39: 30–40: 1］」，そのように信じてきただけであったことが明らかにされる[5]．つまり，こうした規定のもとで観念が考察される限り，観念が〈その res の観念である〉といわれるところの，当の〈その res〉が，「私」の外に実在するかどうかという問題にかんしては，そのもくろみを達することはできないことが判明したのである．

観念の表象性

そこでデカルトは「他の途［alia via］」［40: 5］を採用することになる．ここにおいて観念は二つのものに分けられる．すなわち，1）思惟の様態としての観念，そして 2）res を表象する［repraesentare］観念，この二つのものである．1）まず，観念が思惟の様態としてみられる場合には，いいかえれば，観念が私の思惟に内的なあり方としてみられる場合には，認識という事実そのものは，すべての観念にあって平等である．ここで，思惟の様態［modus］として観念をとらえることは，いいかえれば，観念を思惟の様態として規定することは，それ自体においてみられるかぎり，何ら否定的なことでも，暫定的なことでもなく，むしろ正当なことである．しかしこうした観念のあり方［modus］に着目するだけでは，〈私の思惟〉の外部へと通じていくことはできない．というのも，この観念の規定が指し示すのは，それが思惟の様態であるがゆえに，まさに〈私の思惟〉の内的な〈あり方〉にすぎないということだからである．2）そこで

[5] cf., Gueroult, *Op. cit.*, pp. 171–174.

次に，そのそれぞれが各々ことなるものを表象する観念の検討に議論がうつる．

デカルトはいう．

> ［...］或るもの［観念］が或るものを，他のもの［観念］が他のものを表象する限りにおいて，これらのもの［観念］は互いにきわめてことなっている，ということは明らかである．というのは，どのような疑いもなく［proculdubio］，実体を私に表示する［mihi exhibent］もの［観念］は，単に様態を，いうなら偶有性を，表象するもの［観念］よりも，より大きな或るものであり，さらに，いわば，より多くの realitas objectiva を自らのうちに含んでいるし，またさらには，それによって私が，永遠で，無限で，全知で，全能で，自らをのぞいたすべてのものの創造者であるところの，或る至高なる神を知解するところのもの［観念］は，まちがいなく，それによって有限な諸実体が表示されるもの［観念］どもよりも，より多くの realitas objectiva を自らのうちに有しているからである［40: 10–20］．

この引用文のうちには，デカルト解釈上のいくつかの係争点が含まれるが，私たちは当面のところ「表象」に的をしぼって考察する．

さて，観念がものを表象する，ないしものを私に表示するというのは，いったいどういうことがらなのだろうか．

ここでまず注意すべきなのは，『省察』のこの箇所において，この時点ですでにそれだけは疑うことのできないものとして提示されている私の思惟に議論の基礎を置きつつ，そこから，そしてそれのみから，私の外なる res が実在するのかどうかが考察されていくということであり，要するに『省察』のこの箇所ではまだ私の外なるものの実在は確定されていない，ということである．このことが指し示すのは，ものを表象するないし私に

表示するとはいっても，外来観念の分析にかんしてみられたのと同様に，例えば何らかの物体が私の外部にあって，その映像のようなものが受け取られているというような状態を意味するのでは決してない，ということである．要するに，観念がものを表象するないし私に表示するというこの事態は，私の外なるものにその基礎をおくべきではなく，そうではなくて，今のところは私のうちにこそ基礎づけられなければならない，ということである．

ところで，ここでは世界は省察するものである私の思惟に他ならないのだから，表象性が私のうちに基礎をおくということは，それが私の思惟の内に基礎づけられる，ということに言い換えることができるだろう．ここで，観念の第一の規定を思い起こす必要がある．つまり，観念とはまずは私の思惟の様態ないし内的なあり方である，ということをもあわせて考慮しなければならない．この第一の規定は暫定的なものでは全くなく，ここで論じている第二の規定すなわち観念の表象性の場面においても，それについて疑うことができないものとして提示されている私の思惟にこそ，すべては基礎づけられるべきである，という議論の基盤を与えるものとして有効に機能しているということができる．いいかえれば，Rodis-Lewis のいうように，この時点では観念だけが，それが様態であるところの私の思惟の不可疑性を分有しているために論証に用いられうる唯一の実在なのである[6]．

しかしながら，表象性が思惟のうちへと基礎づけられなくてはならないとはいっても，表象性がすべて思惟のうちに埋没してしまうのであれば，いいかえればアルキエのいうように，「もし認識がものと精神という二つの項によって十全に説明しうるのであれば，ものを否定することはもっぱら私たちを私たち自身のうちに閉じ込めてしまうだろうし，また，物理学者たちの実在論と独我論者の懐疑主義のどちらかを撰択しなければならな

[6] Rodis-Lewis, *Op. cit.*, p. 277–278.

いことになるだろう[7]」．実際，デカルトはここまで，私の外なるものについて，それが実在するかどうかの判断を留保し，私のうちとしての思惟（精神）[8]にとどまり，いわば独我論者としてすべてを疑っていたのであった．しかし「第三省察」のこの個所では，「世界のうちに私ひとりがあるのではない」［42: 22］ことへと議論が展開されていくことを忘れてはならない．それゆえこの表象性の場面においてこそ，今のところ世界がそれであるところの私の思惟を超え出るようなことがらが語られていく，と考えられるべきであるし，加えて，私の外なるもの／私のうちとしての思惟（精神）という二者択一が問題となるのではない，ということにも注意すべきである．というのも，のちに詳しく見るように，ここで表象されているもの［res］は，私の外に実在するであろうものそのものであるわけではない，と考えられるからである．

再び引用しよう．「或るもの［観念］が或る res を，他のもの［観念］が他の res を表象する限りにおいて，これらのもの［観念］は互いにきわめてことなっている，ということは明らかである」［40: 10–12］．以上の考察から，この res の存在様式と表象性とが問題となる，ということがいえる．つまり，ここでの res が私の外に実在するであろうものであるのならば，論証されるべきであったはずのものを前もって論証の過程に組み込んでしまっており，論点窃取の批判をまぬかれないことになるだろう．ところがここでは，くりかえしになるが，私の外なるもの／私のうちとしての

[7] Alquié, *La découverte métaphysique de l'homme chez Descartes*, PUF, 1950 (1966), p. 201．また，こうしたデカルトの着想とは逆に，「第一反論」での Caterus が「把握された対象の存在とそれを把握する知性の存在は，私の表象を完全に説明するのに十分である」と考えているように思われることは Gilson の指摘どおりである．Gilson, *Étude sur le rôle de la pensée médiévale dans la formation du système Cartésien*, Vrin, 1930 (1951), p. 205.

[8] 本稿で私たちは「思惟」・「知性」・「精神」をそれぞれ区別せずにもちいる．というのは，少なくとも「第二省察」においてデカルト自身が思惟・精神・知性を並置して区別しない［27: 14］からであり，私たちが扱っている場面でもこの区別は問題とならないからである．

思惟（精神）という二者択一が問題となるのではないのである．それゆえここでは，res はどこにあるのか，またその res と私の思惟との関係はいかなるものか，ということが問われるべきである．

res と realitas: realitas の生成

以上の問いを念頭におきながら，「表象」と res のかかわりをみていこう．

表象すること［repraesentare］の内実のひとつとして，「absens を praesens させる」とするゴクレニウスの規定[9]がここでは参考になる．というのも，ゴクレニウスのこの規定を参照することで，ここでのデカルトにおける表象性を，彼のテクストにそくしたかたちで整合的に説明することができるように思われるからである．まず，この absens を二つの意味でとらえることができるだろう．すなわち，a）離在してあるもの，そして b）不在であるもの，という二つの意味である．したがって，absens を a）の意味でとるならば，先の命題は「離在してあるものを眼前にあらしめる」と訳されることになる．また b）の意味でとるならば，「不在であるものをあらわれさせる」と訳される．ところで，「もし懐疑が観念（それが明証的であれ）とものとのへだたりから生じるとすれば[10]」，表象性の a）の意味，つまり離在してあるものを眼前にあらしめるという直接性は，デカルトのここでの観念についての議論のうちに，懐疑の入り込む余地がない，ということの十分な理由となるであろう．

しかしながら，ここでの res が私の外に実在するであろうものであるのならば，論証されるべきであったはずのものを前もって論証の過程に組み

[9] Goclenius, *Lexicon Philosophicum*, 1613（reprint, 1980）, p. 981. ここではデカルトの表象性についての私たちの解釈をより進めるためにゴクレニウスの規定をもちいるだけであって，「absens を praesens させる」ということについてこれから論じる私たちの解釈が，表象一般に妥当するような解釈であるというわけでは必ずしもない．

[10] Marion, “Descartes hors sujet”, dans *Les Études philosophiques*, 2009, t.1, pp. 51–64, p. 58.

込んでしまっており，論点窃取の批判をまぬかれないことになるだろう．ところがここでは，私の外なるもの／私のうちとしての思惟（精神）という二者択一が問題となるのではないのだった．それゆえここでも，res とは何であるか，あるいは少なくとも，その規定が問題となるだろう．

ところでデカルトは，「あてにならない記憶が表象するものなど，まったく生じてはいなかったのだ，と私は信じる」[24: 14–16] という．つまり，表象性は，そのものとしてみれば，それについての真・偽が問題とならない場合には，不在であるものあるいは不在でありうるものを，私に対してあらわれさせることもある，ということである．つまり，〈表象する〉ことが，表象される当の res の存在様式，つまりそれが私の外に実在するのかそれともそうではないのか，あるいはそうでないとすればどのような在り方をしているのか，等々ということにかかわらない，ないし，そうした存在様式など問題とはならないようなことがらである，ということもできる．先の表象性の b）の意味も妥当するわけである．〈表象する〉ことの主語が観念であっても事情は同じである．たとえば，「私をのぞいたどんな人間たちも，動物たちも，天使たちも，世界のうちにはないかもしれないが」，しかし「他の人間たち，動物たち，天使たちを表示する［exibere］観念ども」はありうるのである［43: 5–9］．

さて，表象性について真・偽が問われるのはどういった場合においてであろうか．それは，〈表象する〉ことの主語が観念であり，加えてこの観念が「或る res の観念であるのか，それとも res ではないものの観念であるのか」[43: 25–26] ということが問われる場面である．そしてこの場面において，「［観念が］res ではないものを，あたかも res であるかのように表象するときには」[43: 29–30]，その観念には質料的虚偽[11] があるとされる．

[11] 本稿では「質料的虚偽」にかんして立ち入った検討を与える余裕はない．この問題にかんしてはたとえば Emanuela Scribano, “Descartes et les fausses idées”, dans *Archives de philosophie*, 2001, t.2, pp. 259–278. を参照．

さて，この場面において少なくともはっきりといえることは，観念がresを表象している限り，そこに虚偽はないということ，加えて，resといわれるものと，resとみなされてはいけないもの，すなわちresではないものが存在する，ということである．それでは，resとresでないものとは，どのように区別されるのだろうか．この区別が知られるには，少なくともさらに，何がresといわれるべきなのか，ということが知られねばならない．またしてもresとは何か，あるいはその規定が知られなければならないのである．ところがこの区別の場面にrealitasが介入しているということが注目される．「[光と色，音，香り，味，熱と冷，ならびにその他の触覚的な諸性質についての観念は...] resではないものから区別することができないほどの，きわめてわずかなrealitasを私に表示する［...］」[44: 15–16]．もちろんこの記述だけでは，resとは何かをみてとることはできない．しかしながら，この記述から以下のことを知ることができる．すなわち，realitasが多ければ多いほど，resがresではないものから区別されやすい，ということであり，いってみれば，realitasがresとresではないものとを区別するということである．

以上に述べたことと先に引用した箇所（[40: 10–20]）を考え合わせると，realitasがresでないものからresを区別するほかに，さらにまた，観念の有するrealitas objectivaは，観念によって表象される限りでのresとresとを区別するということがいえる．いいかえれば，それを表象する観念がより多くのrealitas objectivaを含むところのresと，この観念と比べれば，それを表象する観念がより少ないrealitas objectivaを含むところの他のresがある，ということである．それゆえ，この区別の基準は，realitas objectivaが多いか少ないか，いわゆる「realitasの度合い」[「第二答返，Rationes，公理6」165: 28]であることがわかる．ことばを換えれば，realitas objectivaを基準として，私の外なるresの実在証明にふさわしい観念が撰別されることになるのである．

先に realitas が res と res でないものを，realitas objectiva が res と res とを区別する，ということをみたが，このことを考え合わせれば，あたかも realitas こそが，論証にふさわしい res を規定していくかのようにみえる．しかしながら，realitas ということばは，res の形容詞化，つまり realis（reale）をさらにまた名詞化したものであるということを考慮すれば，realitas は，いってみれば副次的・派生的なものにとどまり，あくまで res の方が realitas を規定していくべきではないか，ということが当然考えられる．ここで表象性についての議論を思い起こそう．そこでは，res そのものの規定が依然として不確定であったが，少なくともいえることは，そこでの res を外的実在物とみなし，かつ，そのうえで私の外なる res の実在証明を行うことが論点窃取の批判をまぬかれないだろうということであった．つまり，ここにおいては，res の側から realitas が規定され，そのうえで realitas（観念の場面では，そのうちで考察される realitas objectiva[12]）が res を撰別していく，ということがある種の危険をともなうのではないか，といえるのである．そういうわけで，realitas の側から，また観念の表象性の場面においては，その観念のうちで考察される realitas objectiva の側から res を規定していくということは，この危険を回避し，またあくまで私の思惟のうちに基礎づけられつつ私の外を目指すことにとって意義を持つ，ということができるであろう．そして加えて，realitas そのものというよりも，観念のうちなる realitas objectiva が撰別基準となっているということから，私の思惟の外へと超出するという契機は，objectiva という形容詞（あるいは副詞形で objective）が担っているのではないか，という見通しが立てられるであろう．

---

[12] cf.「そのうちで単に realitas objectiva のみが考察されるところの諸観念」“[...] ideis, in quibus consideratur tantum realitas objectiva.”［41: 3–4］．また「私の有する諸観念のうちで私が考察する realitas は単に objectiva である」”[...] realitas quam considero in meis ideis sit tantum objectiva [...],”［41: 30–31］.

objectiva な realitas のもっとも重大な契機であると思われるのは，私の思惟，世界が今のところそれ以外ではない私の思惟の外へと越え出ていく側面である．というのも，この〈越え出ていく〉ということにこそ，この論証の要があったからである．私とは他なる実在，その意味で私の外なる実在が見出される最終的な重点が，原因性と，その原因の realitas の formalis なあり方に置かれていようと[13]，そのような実在を私に示すきっかけとなり参照点ともなるのは，まさに objectiva な realitas なのである．そういうわけで，次に，objectiva な realitas が，とりわけその objectiva という形容詞が担っている射程，ことがらとはどういったものなのか，これが問われるべきである[14]．

---

[13]「[...] formalis なあり方は諸観念の原因どもに適している [...]」[42: 4-5]．なおここでは原因性とその原因の formalis なあり方にかんする考察は行わない．

[14] さまざまな論者がこの realitas objectiva に対してさまざまな解釈を提示している．ここではその主なものを簡単に引く．Gueroult は「観念の内容を realitas objectiva として肯定すること」といい，realitas objectiva を観念の表象内容とかかわらせる（Gueroult, *Op. Cit.*, pp. 188-190. また「第三省察」の第一の神の実在証明にかんする詳細な議論は pp. 168-203 を参照）．また Laporte は，観念がその「似姿」であるところの外的対象との関係においてみられた場合のその観念そのもののことを realitas objectiva とみなしている（Jean Laporte, *Le rationalisme de Descartes*, PUF, 1988（3 éd）, p. 81.）．Cronin は「或る観念の realitas objectiva は本質的にその表象的な本性である．観念のこの表象的本性ないし内容において，表象されたものが何らかの仕方で含まれており，そのため或る観念の realitas objectiva は，その内容が対象のものであるという点で認識する実体と対置される」とする（Timothy J. Cronin, *Objective Being in Descartes and in Suarez*, Garland,1987, p. 30）またさらに，Alquié と Gouhier は，realitas を 1）「私」の realitas，2）ものの realitas，3）観念における realitas という三つの次元ないし場面に区別することにかんしてはほぼ同様な見方をしているが（Henri Gouhier, *La pensée métaphysique de Descartes*, Vrin, 1962（1969）, pp. 123-125. Alquié, *Op. Cit.*, p. 201.），realitas objectiva そのものにかんしては，Gouhier はそれが「不完全な〈存在〉のあり方」（Gouhier, *Op. Cit.*, p. 125.）であると述べる一方，Alquié は「観念のもっぱら表象的な内容から，「第三省察」においてデカルトが観念の realitas objectiva と名付けるものを区別する必要がある」と述べたうえで，「観念の realitas objectiva は表象作用［représentation］それ自体の realitas であり」，「表象された内容のそれでも表象作用を可能にする意識のみの realitas」でもないとする（Alquié, *Op. Cit.*, pp. 208-209.）．本稿で私たちは Alquié の見方に近い理

対象性の問題

観念は私の思惟の様態である．観念の表象性は私の思惟のうちに基礎づけられなければならない．確かにそうである．けれどもそれだけでは，私とはことなる何ものかが私の外にあるということを示し，そのことによって，世界を世界として，私を私として差異づけ，規定するにはいたらない．あくまで私とはことなるものを見出し，私の外へと超出することが目指されているということを忘れないようにしよう．私たちは観念の表象性の場面において，objectiva，あるいは objective ということばに，この〈私の外へと超出する〉という機能をみいだそうとしている．ひとまず，観念によって表象される res を対象と名指してみよう．そのとき，観念が表象する当の res が対象であって，表象性は私の思惟のうちに基礎づけられねばならないのだから，また観念は私の思惟の内的なあり方であるのだから，その対象とは私の思惟に固有の対象でもある，とはいえるにしても，しかしながらそのときもし対象性までもが全面的に私の思惟に埋没してしまうとすれば，その場合には私の思惟を超出する途が閉ざされてしまうだろう．そういうわけで，対象性に対して，それが私の思惟のうちに全面的に埋没してしまうことなく，けれども同時にそこに基礎づけられつつも，〈私の外へと超出する〉という機能をみいだしていくことが望まれる．だがしかし，確かにマリオンが指摘するように，少なくとも『省察』本文において，デカルトはこうした対象性ないし対象にかんして，それを主題的に問題としてとりあげることはない[15]．けれども，そうはいっても，私の外へと超出していくという論証の過程において，私の外に実在するであろう res と，私の思惟のうちで観念が表象する res，いいかえれば観念の

解を示すことになるが，基本的に私たちの議論がそれとの応答で練り上げられた主要なものは村上のものである（村上，前掲書，pp. 5–20）．

[15] Marion, Op. cit., p. 55.

対象を区別すべきであるということは確かである．というのも，第一に，先にみたように，私の外に実在するであろう res に論証の基礎をおくべきではないからなのだし，また第二に，私の外に実在するであろう res を，論証以前に，あるいはそのただなかで，それとしてあらかじめ措定しているとするなら，論証されるべきものが論証の過程にとりこまれていることになるため，論証にもちいられる res が，こうした外的 res とは区別された限りでの，対象としての res であることが必要でもあるからなのである．そういうわけで，以下では対象ないし対象性が，〈私の外へと超出する〉機能を担いうるのかどうか，このことを検討していく．

対象性の構成

さて，objectiva という形容詞は，objcio，さらにその派生形である objectum に密接にかかわるものであるということは，その語形からみてとることができる．それゆえ，この objectiva ということばにかんして考察していく際に，objcio あるいは objectum ということばについて論じていくことには，十分な理由があるといえる．ところで，objcio は「～へと向かって／～の前へ（ob）と投げる（jacio）」という意味を主に持つ動詞であり，objectum はその受動相完了分詞 perfect passive participle から派生した中性名詞である[16]．それゆえ，これらすべてのことばにかんして，概して〈投射性〉の契機をよみこむことができるわけであるが，本稿の問題圏に引きつけてとらえるならば，とりわけ，何が何へと向かっていく投射性なのか，そして，〈投げられたもの objectum＝対象〉とはどこにある

[16] 中畑正志「オブジェクトとの遭遇――「主客転倒」以前の対象概念」『思想』岩波書店（936）2002年．4号，pp. 4–40，p. 7参照．同論文は変更を加えられ以下に再録．中畑正志『魂の変容―心的基礎概念の歴史的構成』岩波書店，2011年．また所雄章『デカルト『省察』訳解』岩波書店，2004年，p. 215も参照した（ただし所は objective/ objectivus に「思念的」という訳語を与えている）．なお本稿では j(i) の表記はすべて j に統一する．

のか，という二点が，まずは問われるべきである．というのも，観念が res を表象するという場面において，当の res を観念が表象する対象として名指すとき，その res-対象とはどこにあるのか，またさらに，res-対象の方から観念（私の思惟に内的なもの）へと向かっていくのか，あるいはその逆なのか，といった問いでもって，ここまでみてきた問題を捉えかえすことができるように思われるからである．

ところで，投射性の方向を問う前に，それによって関係づけられる二つの項を，もう一度措定しなおしてみよう．その二つの項とは，観念とそれによって表象される res である．このとき，観念とは私の思惟の様態であるという規定を想い起こすならば，観念を私の思惟ないし知性と置き換えて，当の二項を思惟／知性と res，というようにあらわすことが許されるだろう．それゆえ問題は，思惟／知性と res とのあいだの投射性，その方向性にあるといえる．ところで，思惟は〈私のうち〉というあり方を割り当てられていることをこれまでみてきた．しかしこのことから，res の方は〈私の外〉にあると即断しないように注意しなければならない．なぜなら，res はどこにあるのか，res の規定とは何なのかということも，これまでみてきたところからも依然として不確定であったからである．しかしながら，res を観念によって表象される対象と捉えるときには，対象はどこにあるのかという問いでもって，res の位置づけが明るみに出てくるのではないだろうか．こうした問題意識と展望をもって議論を進めていこう．

いま res-対象が〈私の外〉にあると即断しないようにしようと注意したが，それは何度も指摘しているように，「第三省察」のこの個所では〈私の外〉があくまで目指されていて，これから確定されようとしているからである．しかしながら，res-対象が語られる場合に，それが〈私の外〉，ここではとりわけ私の思惟／知性の外にあるのではないかといわれることは，それなりの理由があることである．というのも，対象 objectum という概念そのものが，内的なものと外的なものという二義を，

もともと許容しうるものだからである．たとえばゴクレニウスによれば，「内在的はたらきにおける，作用するものとひとつの対象」と「超越的はたらきにおける，はたらくものから分離された対象」が区別されうる[17]．この規定を，ここでの思惟／知性の内・外ということに照らして解釈すれば，前者が思惟に内（在）的な対象として，後者が思惟から分離され，そこから超越しており，その意味で外的な対象として理解されることを許容するのである．このことはデカルト自身のテクストについてもいえることである．たとえば，「[...] 私たちがあたかも諸観念の対象どもにおけるように知得する各々のものは，当の諸観念において対象という資格で[18]ある [...]」[161: 7–9] といわれる．このテクストをみると，ひとつめの対象を，思惟に内的なものとみなしても，あるいは外的なものとみなしても，どちらの場合でもこの文を有意味に捉えることができるだろう．ということは，私たちのもくろみとは違って，対象ということばは，そもそも内・外という区分，それらの分離という契機を，少なくとも第一義的にはもっていないということになるのではなかろうか．

このことの是非をみてとるために，「第三省察」で私の外なる神の実在が証明され思惟の内・外が確定されて以降に，res–対象の位置づけが語られている個所を参照することで，res–対象が外的である，あるいは内的である，といわれうる場面を整理してみよう．デカルトは以下のようにいう．「単に知性の外にある res そのもの」[「第一答弁」102: 9–10] が問題となる場合，res が知性にかんして外的であるという「その側面のもとでは，知性のうちに対象という資格であるということは，まさに外的命名」[102: 10–12] であるという．そして，「しかしながら，私は観念について

[17] Goclenius, *Op. Cit.*, p. 269. それぞれ “Objectum/Vnitum operanti in actione immanente.” “Objectum/Separatum ab agente in actione Transeunte.”

[18] 以下では objective を「対象という資格で」と訳す．cf. Descartes, *Méditations métaphysiques*, présentation et traduction de Michelle Beyssade, Livre de poche, 1990, p. 105.

語っているのであり，その観念は，知性の外には決してなく，そして，その側面のもとでは，対象という資格である［esse objective］というのは，諸対象が通常知性のうちにあるその仕方で，知性のうちにある，ということ以外のことを意味していない」［102: 12–15］と付け加えられる．さらに，「観念を介して知性のうちに実在する res は，現実態における存在者［ens actu］ではない，いうなら，知性の外にあるものではない，このことは真」［103: 8–10］であるともいわれる．ここでは，知性のうちにある res と知性の外にある res が明確に区分されている．つまりその在処が知性の内・外について語られるのは，res であるということである．加えて，観念について語られる場合の res は，知性に内的なものである，ということもみてとれる．そしてまた，〈対象という資格である〉ということは，「諸対象が通常知性のうちにあるその仕方で，知性のうちにある」といわれているのだから，res を観念によって表象される対象としてみなすとき，res–対象は知性のうちにある，ということができる．つまり，観念について res が語られる場合，その res は対象という資格で知性に内的である，といえるのである．

以上のことで注目されるべきは，対象，ないし対象という資格こそが知性の内・外を区分しているのではない，ということである．対象そのものが内・外を区別することはないのである．しかしながらそうはいっても，ここではまさに対象ということばをめぐって，知性の内・外が語られているということは確かである．そして，思惟ないしそれらに内的な観念と res–対象とが密接にかかわりあっている，いいかえれば相関的であるということもできる．このことは，res が観念の対象という資格をもつ場合に，res と観念とが混同されることがあるということからも確かめられる（「観念は，知性のうちに対象という資格である限りでの，思惟された res そのものである」［102: 3–4］）．対象ということばは，知性のうちで，res と観念ないし思惟／知性を相関させるものである，といいかえることもできるだろう．

ここまでみてきたことから，私たちが問題としている「第三省察」における観念の表象性の場面において，objectivaということばにあらかじめ知性／思惟の内・外を区分するという契機を付与しつつ解釈していくことがいかに問題であるかが明らかになったであろう．しかしまた他方で，対象ということばをめぐってこそ，思惟／知性の内・外ということに光が当てられるということも明らかになったであろう．

ここまでの議論から以下のことがいえる．対象ということばが，表象されるresと観念とを思惟／知性のうちで相関させるものであるということは，対象性がresと観念いいかえれば私の思惟に内的なものとを，あくまでそれらが区別されていることを保持しつつも，この時点ではすべてがそこへと基礎づけられるべき私の思惟において語ることを可能にする，ということである．対象は私の思惟に基礎づけられつつ，その意味で対象自身も私の思惟に内的であるとはいえ，あくまで私の思惟とは区別される或るものである．このことは，対象が観念を介して〈私に［mihi］表示される〉ないし〈私に表象される〉という表現が担うことがらでもある．〈私に対して〉ということは，表示され表象される或るものすなわち対象が，私に対置されており，その意味において私とは区別されるべきものであるということである．それゆえ，対象は私の思惟とは区別されるために，私に対して「自らの価値を認めさせることができる[19]」ということもいわれ

[19] Jean-François Courtine, “La doctrine cartésienne de l’idée et ses sources scolastiques”, dans *Lire Descartes aujourd’hui*, Depré et Lories（éd）., Éditions Peeters, 1997, p. 9. 同論文は変更を加えられ以下に再録．J.-F. Courtine, *Les catégories de l’être—Études de philosophie ancienne et médiévale*, PUF, 2003, p. 251. また，「[...] 表象作用としての諸観念の機能は，意識において，それらが現前させるところの諸々の内容を，主体に対置させる（*obversari*）ことである．」Paul Landim Filho, “Idée et représentation”, dans *Descartes Objecter et répondre*, Beyssade et Marion（direction）, PUF, 1994, p. 191.「「対象」という語は，「観念を介して表象されるところのもの」（観念の観念対象）を意味しうるし，あるいは「諸観念を介して表象される場合のものそのもの」をも指し示すことができる．」ibid., n. 1. 強調はFilho.

うる．このことは，対象が，私の思惟において，ということはまた観念において，対象である限りにおいてそれそのものとしてみられ，考察されることを可能にするということを示しているのである．まさにこうした意味において，デカルトの次の記述，つまり「そこにおいて単に realitas objectiva のみが考察されるところの諸観念［ideis, in quibus consideratur tantum realitas objectiva］［41: 3–4］という記述を解釈することができるのである．

以上のことによってこそ，観念によって表象される res を対象として名指すとき，当の観念はその対象のことなりにしたがってそれ自身もことなるということ，たとえば具体的には，実体を表象する観念は，様態を表象する観念とはことなるということが可能になるのである．このことからまた，諸観念を各々の対象にしたがって区別することが可能となる．さらに，上に述べたように，res と観念すなわち私の思惟に内的なものとを，あくまでそれらが区別されていることを保持しつつも，この時点ではすべてがそこへと基礎づけられるべき私の思惟において語ることを可能にするということがらを対象性と名指すなら，そしてアルキエのことばを，それに変更を加えつつ語りなおすならば，観念の realitas objectiva は，表象された res のみの realitas でも，対象性を基礎づける私の思惟／知性のみのそれでもなく，対象性それ自体の realitas であるということができるだろう[20]．つまりそれは，表象された res と，当の表象性を基礎づける私の思惟／知性とを相関させるものであるところの，対象性そのものにかんしていわれる realitas であるということである．realitas objectiva は，対象性それ自体の realitas であるからこそ，私の外へと超出することへと導く端緒となりうるのである．

さて大きな問題が残った．つまり，以上までみてきた表象性の場面において，観念が表象する res，あらかじめ私の外に実在するとみなされては

[20] cf. Alquié, *Op. cit.*, p. 209.

ならない res について，私たちは何を語ることができるだろうか．ここではごく簡単に私たちの作業結果だけを示して本稿を閉じることにしたい．

ここまで述べてきた対象性が，あくまで精神に内的な（intramental）ものであるということ，さらに，観念によって表象される res が，表象する精神からそれでもなお区別されるということは決定的に重要であると思われる．この res とは，デカルトのことばをそのまま受けとるなら，「[...] 知性の外に実在することが想定されないにせよ，それでもその本質のあり方［ratio essentiae］によって私よりも完全でありうる」（「読者への序言」[8: 23–25]）ような res なのである．そしておそらくこの本質とは，〈何であるか quid est〉である．神の観念のうちには，「少なくとも私によって知解されることができる限りでの，神が何であるかということが含まれている」（「第一答弁」[107: 25–26]）といわれ，さらに「どんな res についても，前もって〈何であるか〉が知解されるのでなければ，〈それがあるか〉ということは問われるべきではない」（「同」[107: 27–108: 1]）ともいわれる．「[…] 知ることからあることへと結論することは，まったくもって妥当する．なぜなら，私たちが認識するとおりに，或る res 自身が実際に存在するのでないとするならば，或る res を私たちが認識することはまったくできないからである」（「第七答弁」[520: 5–7（傍点部原典イタリック）]）．それゆえまた私たちが問題にした投射性は，知性の内から外へ，いいかえれば，その不可疑性が確定された〈私〉の「知ること」から，私の外なるものの「あること」への投射性である，ということができるだろう．

参 考 文 献（注で言及した文献は除く）

Bréhier, Émile, *Histoire de la philosophie, tome. 2: la philosophie moderne*, PUF, 1960.

Carraud, Vincent, *Causa sive ratio*, PUF, 2002.

Dalbiez, R., “Les sources scolastiques de la théorie cartesienne de l’être objectif”, dans *Revue d’histoire de la philosophie*, 1929, t.3, pp. 464–472.

Forlivesi, Marco, “La distinction entre concept formel et concept objectif—Suárez, Pasqualigo, Mastri”, dans *les Études philosophiques*, 2002, t.1, pp. 3–30.

Marion, Jean-Luc, *Sur le prisme métaphysique de Descartes*, PUF, 2004.

村上勝三『デカルト形而上学の成立』勁草書房，1990 年.